

# 那珂 85

－那珂遺跡第178次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 1443集

2022

福岡市教育委員会

## 序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。の中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡の発掘調査報告書は自動車営業所建設に伴う調査成果についての記録です。この調査では弥生中期から中世の集落を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、事業者様をはじめとして多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会  
教育長 星子明夫

## 例 言

- 本報告書は博多区那珂6丁目の自動車営業所建設工事に伴って2019年10月17日から2019年11月29日にかけて発掘調査を行った那珂遺跡第178次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市経済観光文化局の屋山洋が担当した。
- 遺構実測・製図等は屋山が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

遺跡調査番号	1949	遺跡番号	401320085	分布地図番号	038 塩原
開発地地番	福岡市博多区那珂6丁目313番1、314番1、316番1、317番1、318番				
開発面積	10.625m <sup>2</sup>	調査面積	196.98m <sup>2</sup>	調査原因	自動車営業所整備
調査期間	2019.10.17 ~ 2019.11.29			担当者	屋山洋

# 那珂 85

－那珂遺跡第178次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書1443集



遺跡略号 NAK-178

調査番号 1949

2022

福岡市教育委員会

## 本文目次

I. はじめに .....	1	2) 土坑 .....	10
II. 調査の記録 .....	4	3) 掘立柱建物 .....	12
1. 調査の経過 .....	4	3. その他の遺構と遺物 .....	17
2. 遺構と遺物 .....	4	III. 小結 .....	19
1) 壓穴式住居 .....	4		

## 挿図目次

第1図 遺跡分布図 (1/50,000) .....	2	第9図 土坑実測図 (1/20・075は1/40) .....	11
第2図 調査地点位置図 (1/4,000) .....	2	第10図 土坑出土遺物実測図 (1/3) .....	12
第3図 調査範囲図1 (1/2,000) .....	3	第11図 SB01実測図 (1/60) .....	13
第4図 調査範囲図2 (1/200) .....	3	第12図 SB02実測図 (1/40) .....	14
第5図 調査区全体図 (1/80) .....	5	第13図 SB03実測図 (1/40) .....	15
第6図 壓穴式住居実測図1 (1/40) .....	6	第14図 掘立柱建物出土遺物 .....	
第7図 壓穴式住居実測図2 (1/40) .....	8	その他遺物実測図 (1/3) .....	16
第8図 壓穴式住居出土遺物実測図 (1/3) .....	9		

## 図版目次

図版1 1) 調査区全景 (東から)	2) SB01 (東から)
図版2 1) SB02 (南東から)	2) SB03 (南から)
図版3 1) SC001 (東から)	2) SC002 (東から)
図版4 1) SC067 (北から)	2) SK075 (北から)
図版5 1) SK059 (東から)	2) SK091 (北から)
図版6 1) SK003土層 (南から)	2) P039土層 (南から)

## 表目次

表1 一字一石經 出土文字数 .....	18
表2 遺構一覧表 .....	19・20

# I. はじめに

## 調査の経過

### 1. 調査に至る経緯

平成30年（2018年）9月26日付けで博多区那珂6丁目313番1、314番1、316番1、317番1、318番の自動車営業所建設に伴う埋蔵文化財有無についての照会（30-2-617）が経済観光文化局埋蔵文化財課に提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡内に位置しているが、申請地の南西部で確認された縄文時代終末から弥生時代初頭の二重環濠は市の指定文化財になり、また東側では那珂郡衙の可能性がある古代の溝や掘立柱建物群など重要な遺構が存在する地域である。そのため平成31年4月24・25日に重機を使用した確認調査を行い申請地内の環濠の位置を正確に把握し、環濠部分に関しては掘削を伴う開発から除外するよう求めた。その後、環濠部分を避けた開発計画が提出されたため、令和元年（2019年）10月17日～11月29日の期間で発掘調査を行った。発掘調査期間中は休憩場所、電気、水道など事業者及び関係各位のご協力を頂いた。

### 2. 調査の組織

調査委託 西日本鉄道株式会社

調査主体 福岡市教育委員会（発掘調査 令和元年度：整理報告 令和2・3年度）

調査統括 福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

埋蔵文化財課長 菅波正人

同課調査第1係長 吉武学（令和元・2年度）

本田浩二郎（令和3年度）

庶務 文化財活用課管理調整係 内藤愛（令和3年度）

調査担当 埋蔵文化財課 屋山洋

## 遺跡の立地と環境

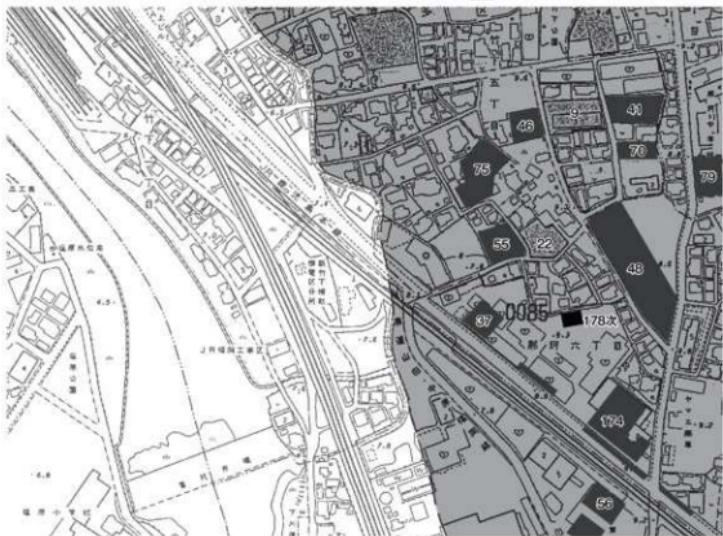
那珂遺跡は福岡平野中央を流れる那珂川右岸の低丘陵上に位置する。この丘陵は八女粘土層と鳥栖ローム層からなり、鳥栖ローム層の上面が遺構検出面となる。周辺には井尻B遺跡、比恵遺跡など弥生時代の「奴国」の拠点集落が存在する。那珂遺跡も弥生時代中期以降は丘陵全体に集落が広がり、銅剣など青銅器が出土するだけではなく青銅器生産遺物が出土するなど奴国の拠点的な集落として栄えた。古墳時代には那珂八幡古墳や東光寺創塚古墳などの前方後円墳が築かれ、古墳時代後期から古代にかけては北側の比恵遺跡で大型掘立柱建物群と柵列が出現する。これは大宰府の前身である「那津官家」と考えられているが、那珂遺跡でも6世紀末～7世紀初頭には瓦が出土するなど官家関連の施設が存在した可能性が高い。今回の178次調査区は丘陵の南西縁部に位置し、西側には37次調査で確認された夜臼式土器が出土する日本最古級の二重環濠があり、東南側200mの56次や117次では8世紀頃の官衙と考えられている溝と掘立柱建物が、174次調査では古代末から中世と推定される溝や掘立柱建物群が確認されている。174次の中世の溝からは11世紀後半の白磁片や瓦器碗などが出土しており、7世紀頃から中世まで断続的であっても官衙や居館が存在する中心的な場所であったと考えられる。178次調査地は南西から北東に向かって緩やかに傾斜していたが、削平を受けて平坦にしたため調査区内では南西側の遺存状態が悪いのに対し、北側が遺存状態が若干良かった。

※遺跡包蔵地の範囲は令和4年2月現在

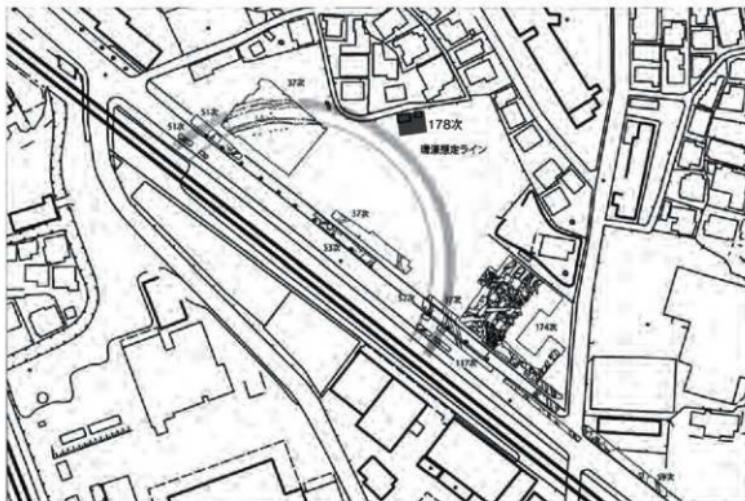


第1図 遺跡分布図（1/50,000）

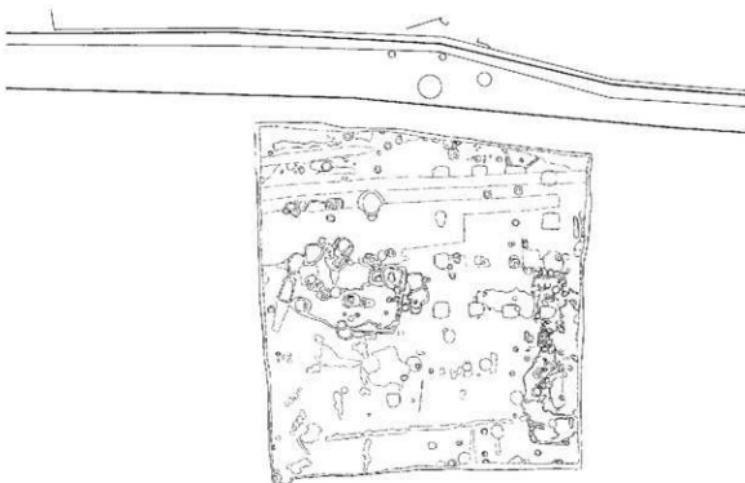
■は那珂遺跡の範囲（2022年2月現在）



第2図 調査地点位置図（1/4,000）



第3図 調査範囲図1 (1/2,000)



第4図 調査範囲図2 (1/200)

## II. 調査の記録

### 1. 調査の経過

申請地の敷地面積は10625.8m<sup>2</sup>を測り全体が開発対象となるが、駐車スペースなど掘削を伴わず埋蔵文化財に影響を及ぼさない部分は調査対象から外したため、発掘調査を行ったのは事務所及び車両整備基地部分と今回の洗車場部分の2箇所である。事務所及び車両整備工場部分は平成30（2018年8月9日から平成31（2019）年1月18日に調査を行った（那珂遺跡174次調査。福岡市埋蔵文化財調査報告書第1393集『那珂82』）。洗車場部分は174次調査時点では設計が未定であったが、その後場所等が決まり掘削が避けられないことが判明したため、今回178次調査として発掘調査を行った。申請地内には1992年に行われた37次調査で夜臼式土器を伴う二重環濠が確認されている。今回の開発では事前に二重環濠の範囲を確認するトレンチ調査を行い、車両基地及び洗車場は環濠に影響を与えないよう設計が行われた。178次調査は申請地の中央北辺にあたり、二重環濠の北東側に位置する（第3図）。178次の調査区は北東側に緩やかに傾斜しており、現地表面から鳥栖ロームの遺構面までは20~40cmを測る。表土全体が近代盛土で砂利を主としコンクリや煉瓦片を多量に含む。10月17日に機材やコンテナ倉庫を搬入して調査の準備を行い、翌18日に重機を使用して表土剥ぎを行った。ローム表面には砂利やレンガ・コンクリート片が食い込んでいたが申請地は元々大きく削平されており、これらのガラが無くなるまで重機で削ると遺構が消失してしまう可能性があったため、手作業で一つずつ除去を行った。除去と攪乱の掘り下げで約1週間ほどかかり、その後、遺構検出と遺構の掘り下げ、測量等を行い11月21日に全景写真の撮影、その後は遺物の取上等を行った。途中周辺に散乱する白色の石に墨書きがあるのを見たため、27・28日はその回収を行い、11月29日に機材と遺物の撤収をして調査を完了した。

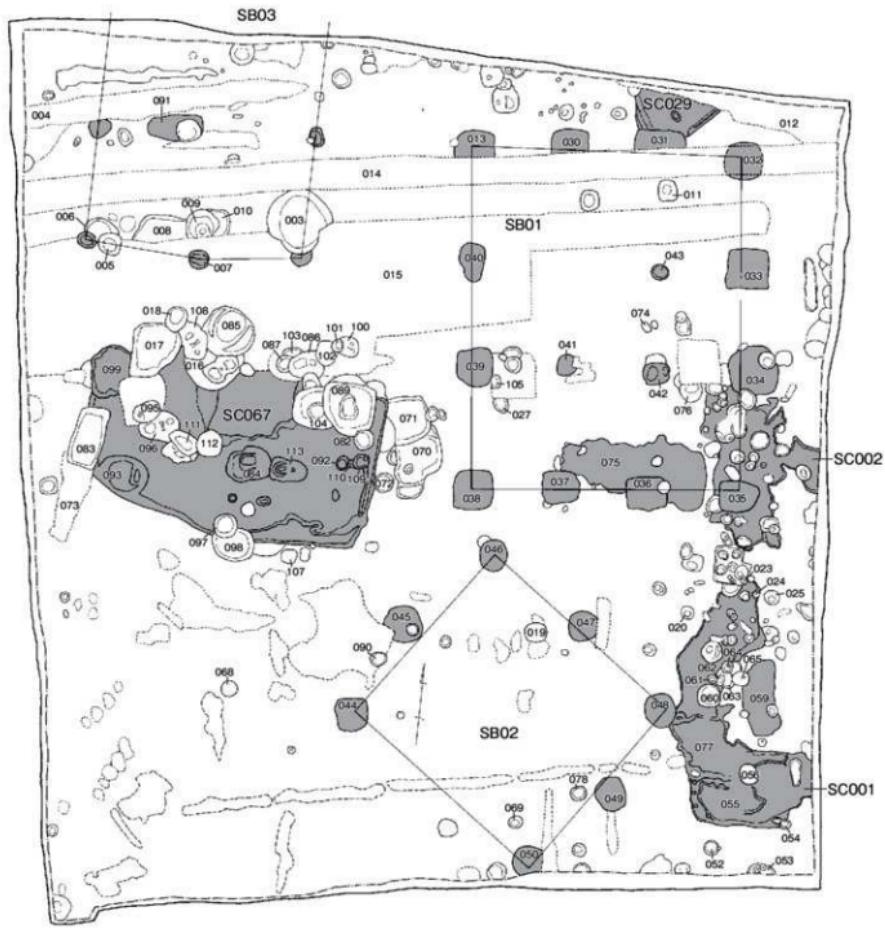
### 2. 遺構と遺物

遺構から出土した遺物の詳細は表1（P19~20）に記載している。

**1) 壴穴式住居** 報告する4軒のうちSC067以外は床面が削平されており、床下掘方のみの遺存である。SC001・002は遺存した深さが2~3cmと浅く、堅穴式住居とは断定しづらく、全く別の遺構ではないかと調査時にかなり悩んだが、今回は堅穴式住居として報告した。SC001・002・067は周辺に比べ遺構密度が濃い。SC001・002は径15~30cm、深さ3~30cmの柱穴状の掘り込みが多く見られるのに対してSC064は径40~80cm、深さ20~80cmと大きめの掘り込みが集中する。

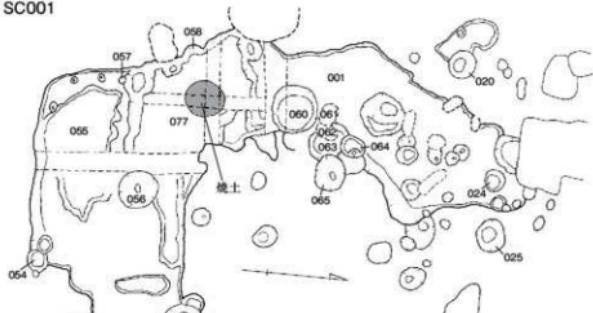
**SC001(第6図)** 調査区の南東隅に位置し、SB02に切られる。東側は調査区外に延び、現状で南北4m、東西23mを測る。底面までの深さが3cm程なため、断面図は載せていないが、一部掘り込み以外はほぼ平坦である。中央から北側に円形の窓みが集中するが、多くは深さ2~5cm前後である。主柱穴は不明で、西縁中央部が西側に張り出した部分(077)は焼土ブロックを含み甕の痕跡と考えられる。西壁南半で壁に沿って径5cm程の小孔があり、これは壁板を支える杭痕か。遺物は001(掘方全体)から7世紀頃の須恵器片が、055(南西隅掘方)から波状文が施された須恵器片が出土した。いずれも小片で実測できなかった。他に弥生時代中期から古墳時代と思われる素焼きの土器小片が多く出土した。

**SC002(第6図)** SC001の北側に位置する。SB01に切れ、SK075を切る。東西1.7m、南北3.4mを測り、堅穴式住居の床下掘方と思われる。SC01と同一遺構の可能性も考えたが、その場合一辺が8mと大型になることから2軒とした。検出面からの深さ4cm程しか遺存しておらず、全面にSC01と同

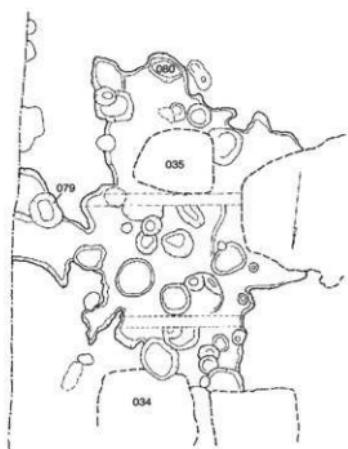


第5図 調査区全体図 (1/80)

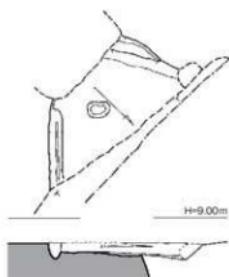
SC001



SC002



SC029



0 1m

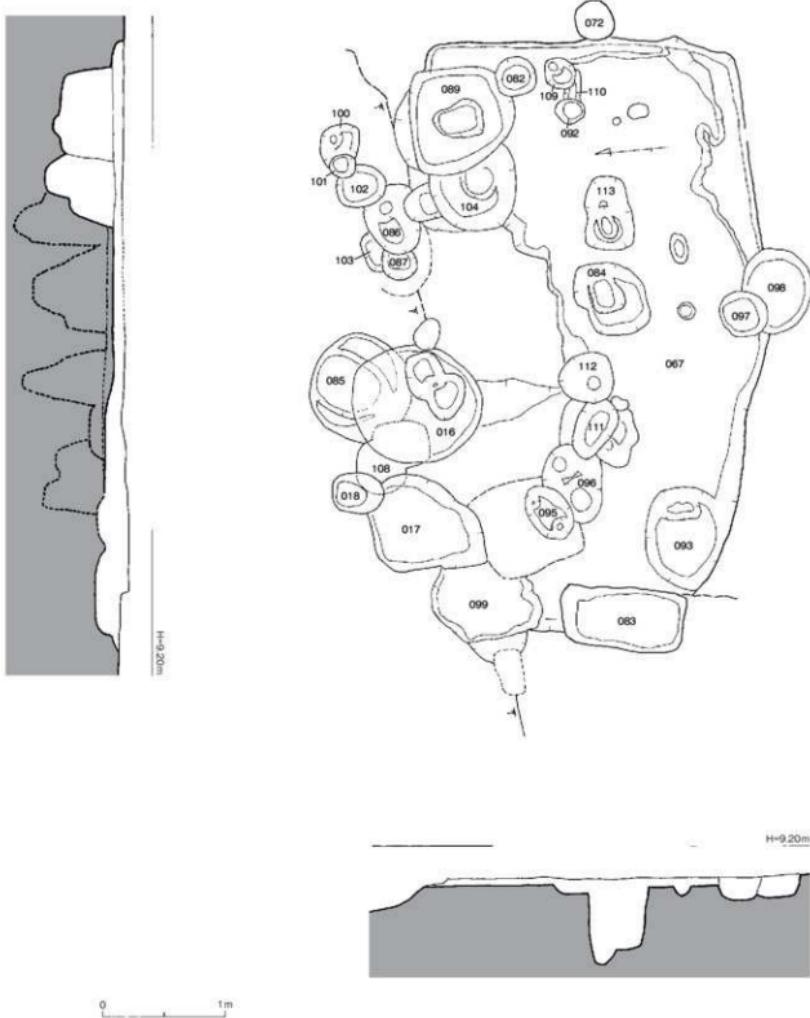
第6図 積穴式住居実測図1 (1/40)

様の窪みが見られる。出土遺物として須恵器坏蓋と須恵器壺の他に弥生時代の土器片や白磁片が3点と瓦器碗と思われる小片が1点出土した。SB01に切られていることから古墳時代後期から古代前期とすると、白磁片は混入したものと思われる。出土遺物（第8図001～003）。001・002は須恵器壺片である。001は表面灰色、胎土は灰白色を呈し、白色砂等をほぼ含まない。調整は表面は平行タタキ後にカキ目、内面は青海波紋を施す。002は表面と胎土が灰白色で、内面は青灰色を呈す。白色砂等は含まない。調整は外側が細かな格子状タタキで内面は同心円状のタタキを施す。003は須恵器坏蓋片である。表面は灰色、胎土は暗橙色を呈し、白色砂等はほぼ含まない。外側天井部に平行する2本のヘラ記号を刻む。

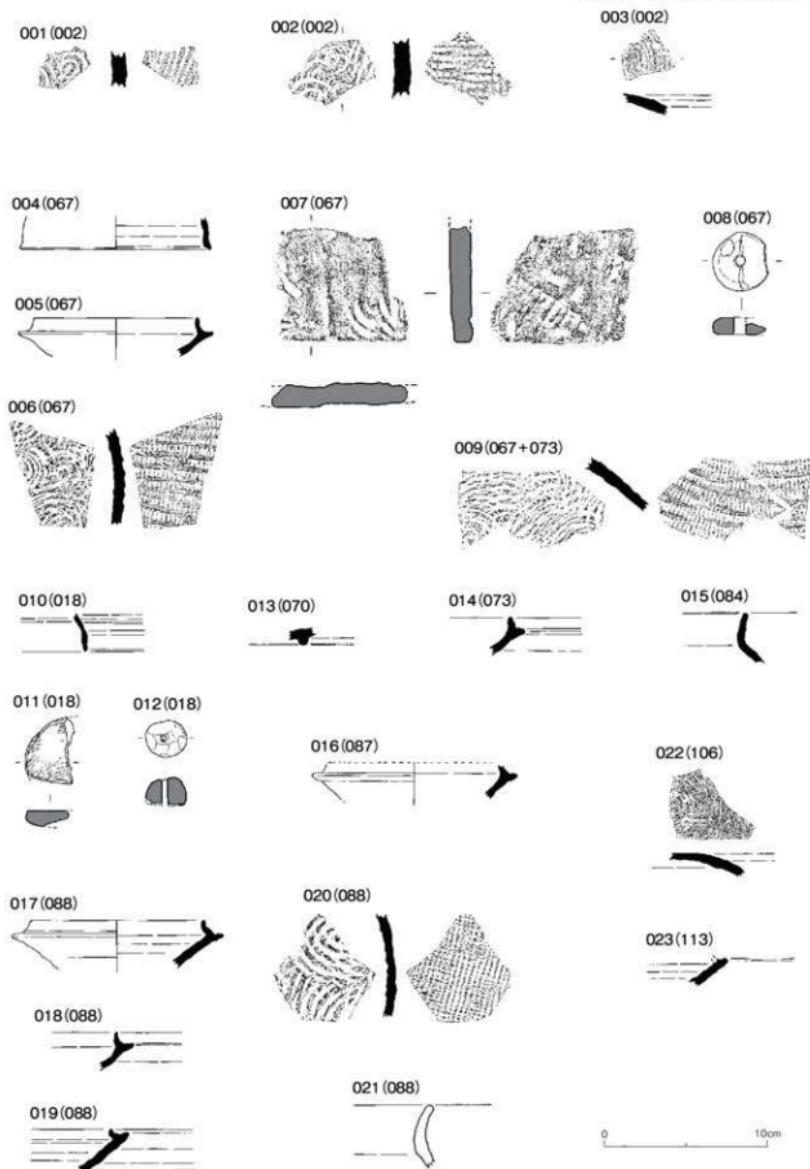
SC029（第6図） 調査区北東隅に位置し、南端の角をSB01に切られる。遺構のほとんどが調査区外にのび、調査区内では東西1.2m、南北1.1m、深さは最大で14cmを測る。埋土は褐色土を呈す。東壁に沿って幅11cm、深さ10cmの壁溝が延びる。床面は削平されて残っておらず、床下の掘方のみである。埋土中から素焼きの土器片が7点出土した。時期は不明である。

SC067（第7図） 調査区中央から西寄りに位置する。北側が搅乱に削平されており、本来の規模は不明である。現状では東西4.8m、南北3.2mを測り、底面までの深さは10～14cmを測る。床面が遺存しているかどうかは不明である。中央部分の底面は径1.5m程の範囲で周辺より6～9cm高くなっている。それを囲むように柱穴状遺構が集中する。中央部を囲む柱穴状遺構のいづれかが生柱穴と考えられる。第7図の平面図左側の断面見通し図は主軸ラインから南側の柱穴状遺構の深さを見通したもので径40～70cm、底面からの深さ50～80cm前後の穴が並ぶ。調査区全体の中で067周辺の遺構密度が高くなっているのは偶然ではなく067に伴う掘り込みが多いと思われるが、掘り込みのすべてが067に伴うのかは明らかにできなかった。067の掘方や柱穴からはSC001・002と同様に6世紀後半から7世紀前半の須恵器坏・坏蓋が出土しているが、上から掘り込んだ遺構を見逃している可能性がある。遺物は須恵器の他に弥生中期から古代と思われる素焼きの土器片が多く出土した他、蛇紋岩製の紡錘車片が出土した。出土遺物（第8図004～023）は067とその周囲で検出した遺構から出土した遺物である。004～008は067掘方から出土した。004は須恵器坏蓋、005は須恵器坏、006は須恵器壺、007は板状土製品の破片で8.5×7.2cm、厚さ1.5cmを測る。図の右側は一部に平行タタキを施す。左側は青海波紋状のタタキ後に一部をナデ消す。色調は橙色で1～2mmほどの白色砂を多く含む。焼成は良好である。瓦片か。008は蛇紋岩製の紡錘車で径35mm、厚さ11mmを測る。中心からややズレて径6.5mmの孔を穿つ。約1/4が欠損しており重量は不明である。009～023は067に伴うと考えられる遺構から出土した。009は須恵器壺である外面は平行タタキ後回転カキ目を施す。色調は表面が灰茶で胎土は青灰色を呈す。010～012は018から出土した。010は須恵器坏蓋である。外面は灰色で胎土は灰白色を呈す。胎土に1mm以下の白色砂を少量含む。011は蛇紋岩製石製品の破損品である。長さ41mm、厚さ10mmを測る。表面と側面など前面に粗い研磨痕が見られ、未完成品の可能性が高い。遺存する縁部はやや歪で復元すると楕円形に近いと思われる。穿孔はみられない。未製品で成形中に破損して廃棄された可能性がある。012は土製の玉で断面は台形に近い。平面はやや楕円形で長径26.5mm、短径21.5mmを呈し、4.4mmの穿孔を底部から斜め上に穿つ。表面は薄く化粧土が覆っているようで、細かな雲母片と白色砂が少量見られる程度だが、胎土中には1～2mmの白色砂を多く含む。013は須恵器高台付坏である。灰白色を呈し、白色砂等は含まない。外面は全面に回転ナデ、内面は回転ナデと坏部底面には指ナデを施す。焼成は良好である。014は須恵器坏口縁である。灰白色を呈し焼成はやや軟質である。白色砂は1mm以下を少量含む。015は須恵器短頸壺の口縁から肩部である。胎土は青灰色、表面は少し緑を帯びた暗灰色を呈す。胎土に1mm以下の白色砂を少量と0.5mm以下の白い粒を多く含む。焼成は良好

SC067



第7図 竪穴式住居実測図2 (1/40)



第8図 積穴式住居出土遺物実測図 (1/3)

である。016は須恵器坏で復元口径10.5cmを測る。灰色を呈し胎土は若干赤みを帯びる。1mm以下の白色砂を少量含む。調整は内外面とも回転ナデで外面には成形時の凹凸が目立つ。口縁端部が連続して欠損しているのは焼成時の熔着のためか。焼成は良好である。017～021は088から出土した。017～019は須恵器坏で017は復元口径10.7cmを測る。内面と口縁部は青灰色を呈す。外面坏部は灰軸の影響で白みを帯びる。胎土は精良で白色砂はごく少量である。調整は外面坏部が指ナデで他は回転ナデを施す。018は暗青灰色を呈し、胎土は赤みを帯びる。1mm以下の白色砂を少量含む。全体に回転ナデを施す。019は青灰色で外面坏部は灰軸のため白味を帯びる。1mm以下の白色砂を多く含む。全体に回転ナデを施し、焼成は良好である。020は須恵器壺片である。青灰色を呈し外面は平行タタキ後に回転カキ目を施す。内面は同心円状の当具痕が残る。021は土師質窯で赤橙色を呈す。全体に1mm以下の白色砂を多く含み、外面には細かな雲母片がみられる。表面全体にこまかに凹凸があるがその一部は植物の圧痕である。022は須恵器坏蓋で外面にヘラ記号を施す。外面は暗灰色、胎土と内面は灰色を呈す。白色砂はごく少量で断面では薄い粘土層を数枚確認できた。外面が回転ナデ、内面は指ナデである。023は須恵器坏の口縁端部である。内外面は灰色、胎土は灰白色を呈し、胎土は精良で白色砂を含まない。全体に回転ナデを施すが、全体に丁寧に仕上げている。焼成は良好である。

## 2) 土坑

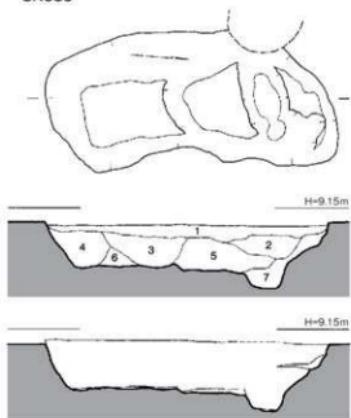
**SK059（第9図）** 調査区南東隅に位置し、SC01に切られる。平面形は南北に長く、わずかに弧を描く。長径118cm、短径49cm、深さ最大28cmを測る。主軸は南北に近い。底面は南側から北側に向かってわずかに低くなり、北端から20cm南側に柱穴状の掘り込みがある。土層図から埋没寸前に少なくとも3回の掘り込みが確認できる。出土遺物（第10図024・025）。024は弥生時代中期の壺胴部下端部片である。赤橙色を呈し、胎土は全体に細かな雲母片を多く含むが、胴部に細かな白色粒、底部には1mm前後の白色砂を含む。調整は摩滅のため不明である。025は窯底部片である。淡橙色を呈し1mm以下の白色砂と雲母片を多く含む。外面は継ハケ、内面と外底部はナデを施す。

**SK075（第9図）** 調査区東側中央に位置し、SC02に切られる。長径250cm、短径96cmを測る。主軸はN-84°～Wである。底面は西から東に向けて段々と低くなっている、底面までの深さは西端で13cm、東端で64cmを測る。遺物は弥生時代中期の高坏脚部片や弥生時代と思われる壺片や器台片が出土した。出土遺物（第10図026～028）。026は壺肩部片である。肩部は球状を呈し頸部との境に突端がつく。色調は黒褐色を呈し1mm前後の白色砂を多量に含む。調整は外面が摩滅のため不明、内面は不明瞭だが工具を使用した継ナデか。027は高坏脚部である。底径13.9cm、遺存高10.5cmを測る。淡橙色を呈し、胎土は暗灰色を呈す。1mm前後の白色砂を多量に含む。外面は全体に厚く、内面は一部に薄く赤色顔料を塗布している。028は器台で復元底径は11cmを測る。摩滅が著しく器表面が残っていない。外面は淡橙色～黄白色、内面は黄白色を呈す。胎土に1mm程の砂を多量に含む。

**SK091（第9図）** 調査区北西隅に位置し、南東部を柱穴に切られる。平面形は東西に長く、長径87cm、短径49cm、深さ42cmを測る。底面は西側が高く深さ34cmを測るが、土層観察によると少なくとも3回の掘り込みが確認されており異なる柱穴の切り合いである可能性がある。須恵器坏蓋、須恵器片、壺（弥生時代中期）、土器片（弥生時代～古代）などが出土した。

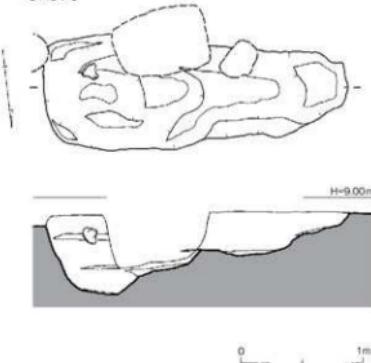
**SK003（第9図）** 調査区の北東側に位置し、南側を近代の擾乱に切られる。平面形は梢円形であったと思われるが、現状で104×101cmを測る。深さは41cmで埋土は上下2層に分かれており、下層は暗黄褐色土で黄褐色ロームブロックと黒色土ブロックがグチャグチャに混じる。人為的な埋め戻しである。上層は黒色土で2mm以下の黄色ロームの粒を多量に含む。SC067の北側に位置しており、067内

SK059



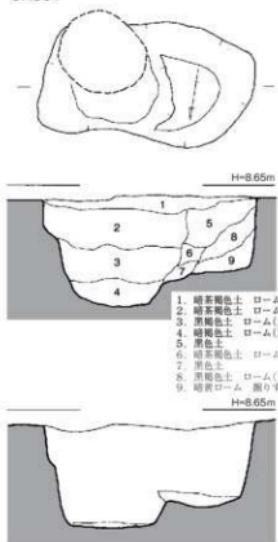
1. 黒褐色土 2~5mmのロームを多く含む
2. 黄褐色粘質土 黄色ローム(5~10mm)を少量含む
3. 黄褐色粘質土 黑色土と黄色ロームのブロックを含む
4. 黄褐色粘質土 黄色ローム(5~10mm)を少量含む
5. 黄褐色粘質土 黄色ローム(5~10mm)を多く含む
6. 黄色ロームがブロック状で詰まっている
7. 晴黄色ローム 6層に亘る

SK075



0 1m

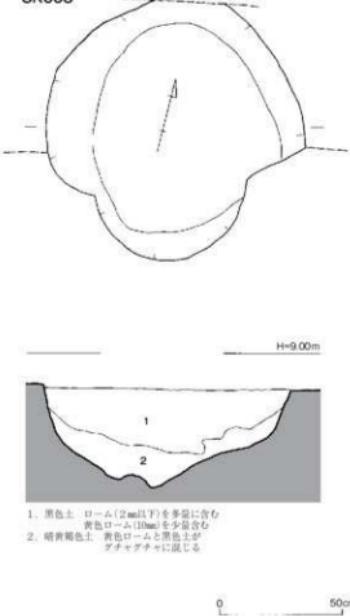
SK091



1. 晴赤褐色土 ローム(2~10mm)を多量に含む
2. 晴赤褐色土 ローム(5mm前後)を含む
3. 黑褐色土 ローム(2~3mm)を少額含む
4. 黑褐色土 ローム(2~10mm)を多く含む
5. 黑褐色土
6. 晴赤褐色土 ローム(2~5mm)を多く含む
7. 黑褐色土
8. 黑褐色土 ローム(2~10mm)を多量に含む
9. 晴黄ローム 膜りすか?

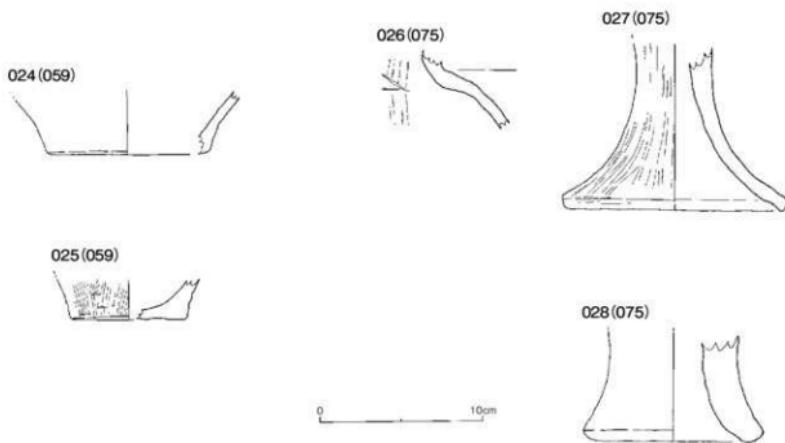
H=8.65m

SK003



0 50cm

第9図 土坑実測図 (1/20・075は1/40)



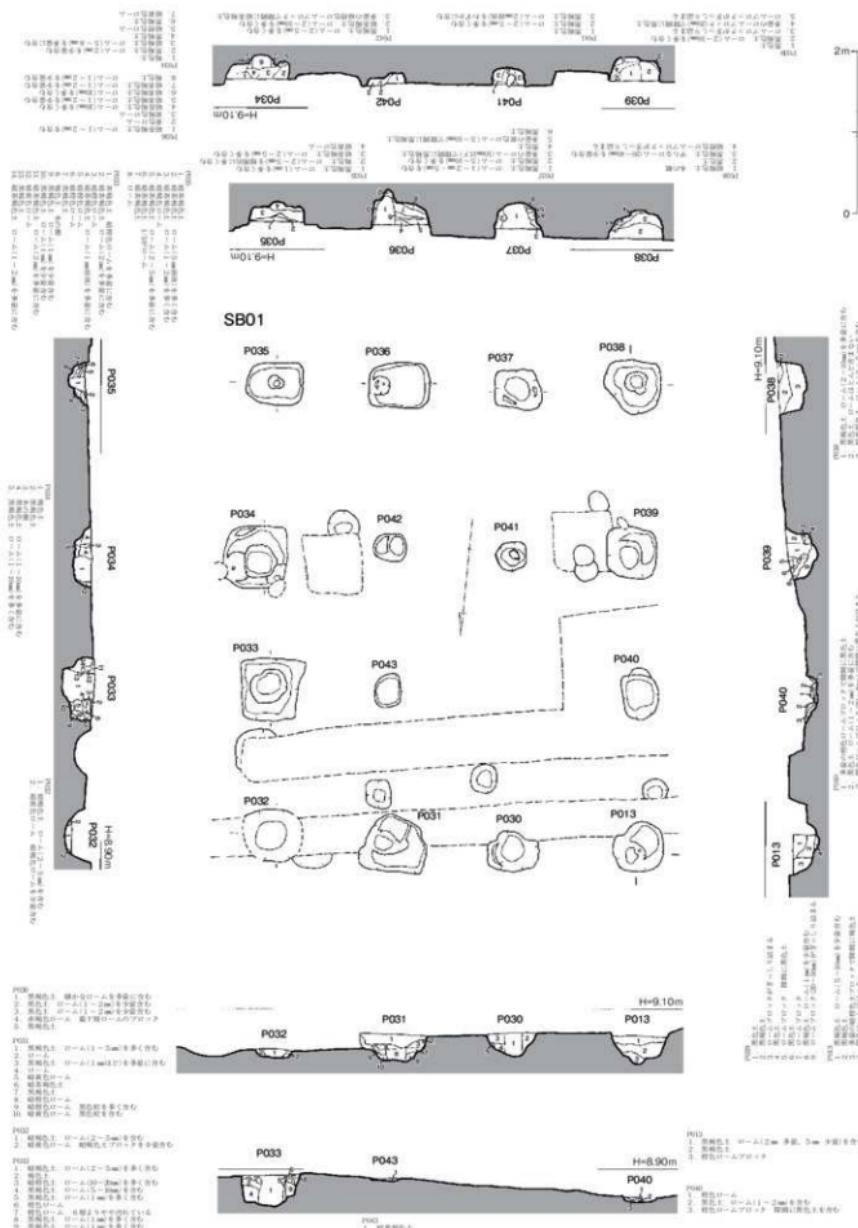
第10図 土坑出土遺物実測図 (1/3)

で確認された土坑と大きさが同程度であるため、067に伴う遺構の可能性がある。須恵器大甕片が1点出土したほか、土器小片が出土した。

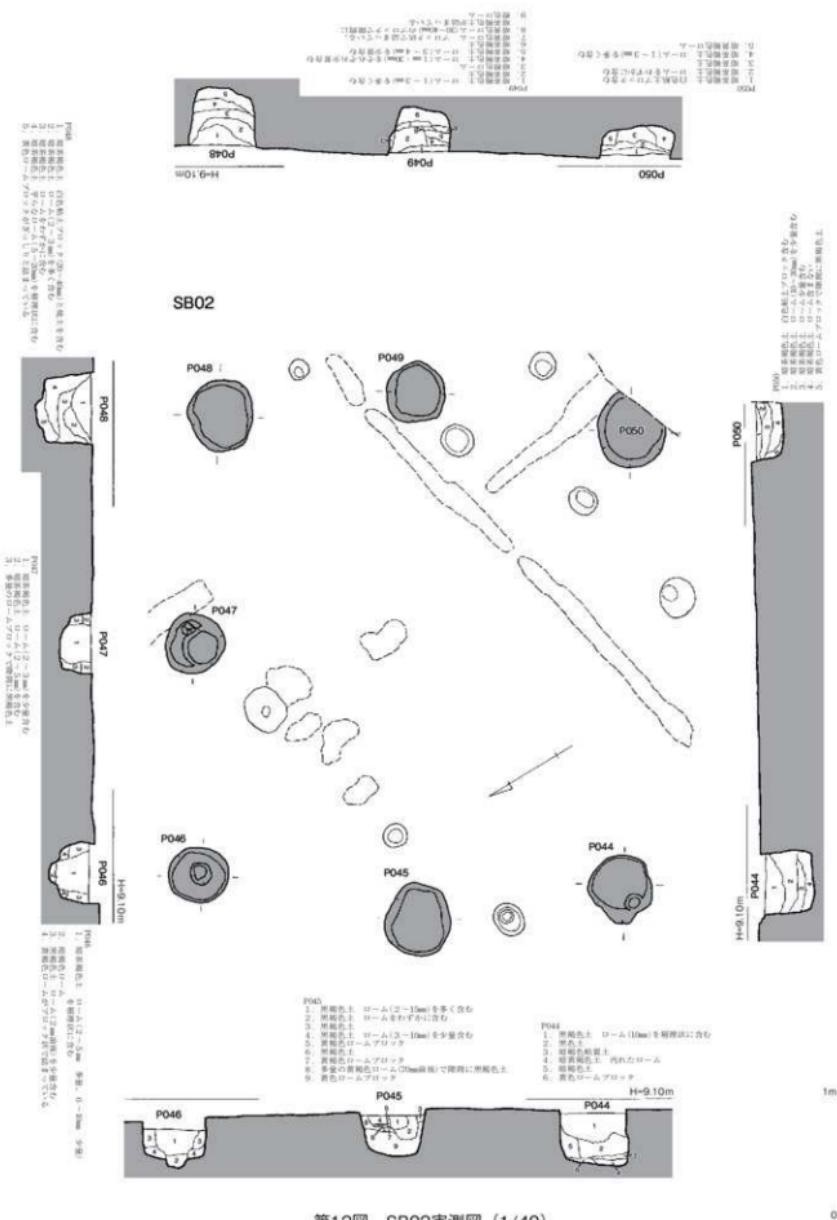
### 3) 挖立柱建物

**SB01 (第11図)** 調査区の北東部に位置する $3 \times 3$ 間の総柱建物である。主軸はN-7°-Wで、桁行き6.3m、梁間5.4mを測る。柱間は芯々で1.5~2.0mである。中央北西の柱穴を欠くが、東隣のP043の深さと比較すると削平されたものと思われる。柱穴の平面形は円形、隅丸方形、隅丸長方形、不整形と様々で径37~85cm、検出面からの深さは11~42cmを測る。遺存する柱穴15基のうち6基で柱痕を確認出来た。柱痕径は16~25cmである。P037では中央に柱を抜いた痕跡があり、その外側にはローム層と黒色土層による版築を確認した。遺物はP031・P036・P037から須恵器片が出土した他、弥生時代から古代と思われる素焼きの土器小片が出土した。時期が判る須恵器は6世紀代のものと考えられる。出土遺物 (第14図029)。029は須恵器壺蓋でP037から出土した。全体に灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土は白色砂等を含まないもののスが多く、やや粗めである。断面では粘土を張り足しながら厚さを整えている様子を伺うことができる。調整は全体に回転ナデであるが外面天井部にわずかに回転ヘラ削りを施しているのを観察できる。

**SB02 (第12図)** 調査区南東部に位置する $2 \times 2$ 間の側柱建物でSC001を切る。主軸はN-60°-Wを測りSB01・03とは大きく異なる。柱穴は南西辺の中央を欠くが、他の柱穴の深さと比較すると元々なかったと思われる。平面はきれいな長方形ではなく桁中央のP045とP049はやや外側に位置する。柱穴は円形もしくは楕円形で径は48~61cm、検出面からの深さは28~47cmを測る。桁行4.4m、梁間3.4mを測り、柱間は芯々で1.6m~1.9mを測る。柱穴7基のうちP045の第2層は柱痕の可能性があり径は18cm程である。P046・P047・P049・P050では柱の抜痕を確認した。P045・P049で確認した薄い水



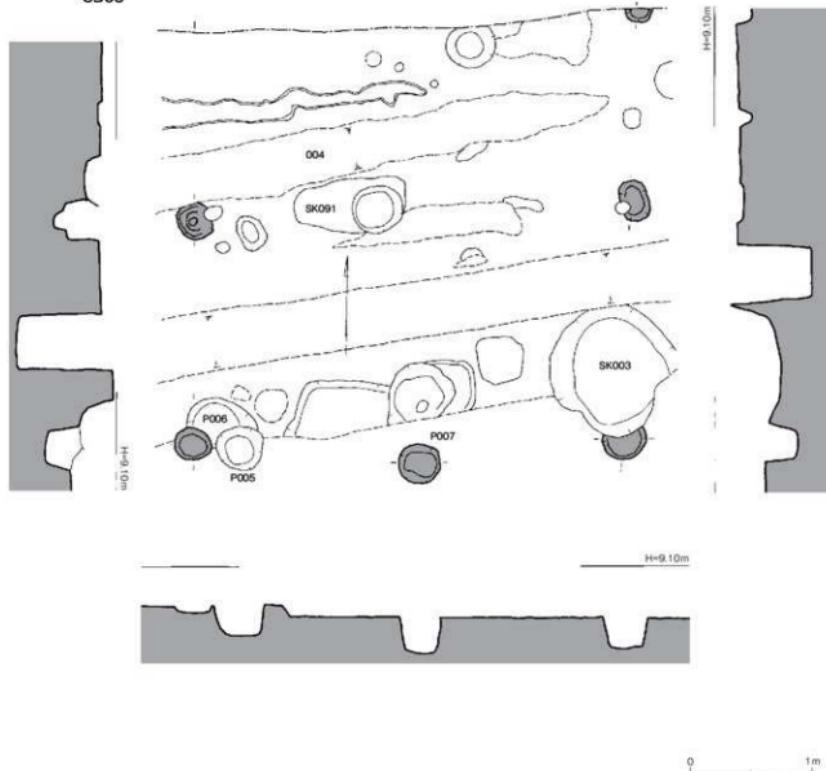
第11図 SB01実測図 (1/60)



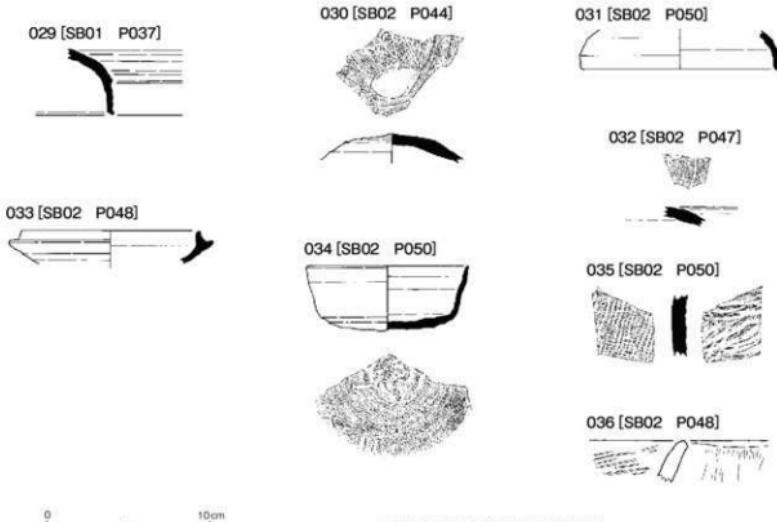
第12図 SB02実測図 (1/40)

平方向の堆積は版築の痕跡である。遺物は土器小片の他、P044・P047・P048・P050で須恵器片が出土しており、そのうち時期が判るものは6世紀末頃とSB01とはほぼ変わらない時期である。出土遺物(第14図030～036)。030～032は須恵器壺蓋である。030は外側が暗赤灰色、内面は灰色を呈す。外側口縁部は回転ナデ、天井部は回転ヘラ削りで平行する3本のヘラ記号を刻む。内面はやや雑な指ナデを施す。胎土は砂を含まず若干キメが粗く暗灰色であるが、外側側に貼り付けられた厚さ1.6mmの化粧土は灰白色を呈しキメが細かく精良である。暗灰色の部分は薄い粘土を何回も貼り付けており隙間に挟まれた空気が熱で膨張した空間がいくつか見られる。031は暗灰色を呈し、胎土はやや粗めで1mm以下の白色砂を少量含む。全体が回転ナデで焼成は良好である。032は暗青灰色を呈し胎土は白色砂と0.5mmほどの黒色粒をいずれも少量含む。内面は指ナデ、外側は回転ナデで平行する2本のヘラ記号

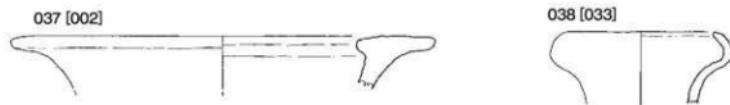
SB03



第13図 SB03実測図 (1/40)



※遺物番号の後の〔〕は出土遺構番号



第14図 挖立柱建物出土遺物・その他遺物実測図 (1/3)

を刻む。033・034は須恵器環である。033は復元口径10.1cmを測る。外面は暗青灰色、内面は青灰色を呈し、全体に回転ナデを施す。胎土はやや粗めで内外表面に1mm以下の白色砂と黒色粒を含む。焼成は良好である。034は約1/3が遺存している。復元口径10cmを測る。内外表面は赤褐色、胎土は青灰色を呈す。胎土はやや粗めで2mm弱の白色砂を少量と0.5mm程の白色粒を多量に含む。内面側に貼り付けられている厚さ0.7mmの化粧土は青灰色を呈し精良である。環部は両面とも回転ナデで、内底部は指ナデ、外底部は回転ヘラ削りを指ナデで少しナデ消してから直線と曲線2本のヘラ記号を刻んでいる。035は須恵器壺の胴部片である。外面は暗橙色、内面は灰色を呈す。胎土はやや粗めで暗橙色を呈するが、内側は厚さ0.6mmだけ灰色を呈する。調整は外面が平行タタキ後回転カキ目、内面は同心円状の当具痕が残る。焼成は良好である。036は土師質壺である。外面は赤黒褐色、胎土は赤橙色を呈し白色砂と雲母片を含む。内面は斜め方向のハケ後横ナデ、外面は縦方向のハケ後横ナデを施す。

焼成は軟質である。

SB03（第13図） 調査区北西隅に位置し、調査区の北側に延びる。調査区内では $2 \times 2$ 間の側柱建物である。柱穴は平面形が円形もしくは楕円形で径32~37cm、深さ3~37cmで柱間は1.6~2.0mを測る。P007で柱痕を確認した。柱痕径は11cmを測り、版築はみられない。遺物はP007で素焼きの土器片が3点出土したのみである。

### 3. その他の遺構と遺物

1) 弥生時代と特定した遺構は数少ないが、遺物は後世の遺構から多く出土しており、本来遺構が密に存在したことを伺わせる。ここは後世の遺構から出土した弥生時代中期の土器を器2点記載する（第14図）。037は広口口縁壺である。復元口径26cmを測る。摩滅のため表面はほぼ遺存していないが赤色顔料の痕跡がわずかに残る。胎土には白色砂を多く含み、焼成はやや弱めである。038は袋状口縁壺の口縁部である。表面は全面が摩滅している。胎土中に1~4mm程の砂を多量に含む。焼成は弱い。

#### 2) 一字一石経

調査区北壁に露出した白色の小礫に墨書があるのに気がついて周囲を探索したところ、調査区の北側道路沿いに礫が散乱しているのを確認した。石は一字一石経で、北側道路沿いの塙の基礎掘削溝中に広く分布していた。道路沿いの旧外塙基礎を掘った際に埋納遺構が削平され、その後塙の基礎部

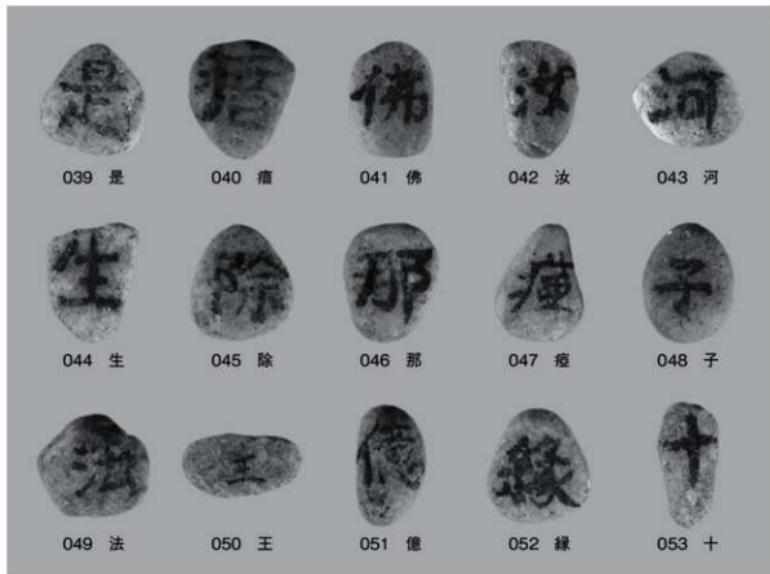


表 1 一字一石經 出土文字數

黑書 數																			
諸	39	十	9	弗	5	在	3	功	2	又	2	木	1	士	1	聞	1	含	1
是	35	第	9	方	5	死	3	庚	2	皆	2	歸	1	斯	1	涿	1	笑	1
佛	35	出	9	明	5	惡	3	江	2	南	2	議	1	祠	1	但	1	寒	1
無	32	何	9	會	4	小	3	高	2	昔	2	北	1	字	1	遂	1	私	1
人	29	道	9	安	4	證	3	論	2	蛤	2	郊	1	下	1	着	1	文	1
衆	28	妙	9	意	4	淨	3	讚	2	目	2	究	1	綬	1	著	1	塘	1
法	26	者	9	謂	4	較	3	持	2	面	2	去	1	聚	1	頂	1	辟	1
等	24	音	8	家	4	外	3	自	2	物	2	區	1	周	1	聽	1	蛇	1
我	24	龜	8	色	4	退	3	實	2	哉	2	清	1	宗	1	珍	1	变	1
如	23	知	8	男	4	智	3	拮	2	落	2	競	1	猜	1	詰	1	奉	1
一	22	汝	8	界	4	罔	3	疋	2	輪	2	況	1	匀	1	典	1	崩	1
而	22	後	8	歎	4	土	3	舅	2	虞	2	曲	1	頤	1	止	1	放	1
大	22	赤	8	起	4	拔	3	修	2	六	2	禽	1	掌	1	取	1	望	1
爲	22	身	8	譲	4	定	3	曹	2	分	2	堅	1	昭	1	怒	1	他	1
所	22	樂	8	衣	4	帝	3	除	2	窩	2	憩	1	照	1	新or茶	1	恋	1
之	22	足	7	至	4	涅	3	誦	2	偏	2	俱	1	將	1	塔	1	廄	1
華	22	雨	7	示	4	悲	3	淨	2	𠂇	1	菴	1	稱	1	勤	1	煩	1
說	21	此	7	重	4	比	3	純	2	合	1	眞	1	食	1	專	1	凡	1
世	21	師	7	衆	4	病	3	飾	2	哀	1	芸	1	穢	1	達	1	盆	1
得	20	虯	7	須	4	魔	3	辱	2	垢	1	倉	1	信	1	毒	1	勝	1
不	20	住	7	𠁧	4	前	3	神	2	悉	1	消	1	新	1	擗	1	末	1
生	18	善	7	宜	4	未	3	進	2	值	1	慶	1	突	1	幾	1		
尊	18	德	7	力	4	通	3	訊	2	暗	1	敬	1	應	1	友	1	右	1
哲	18	能	7	富	4	宮	3	既	2	威	1	計	1	泥	1	泥	1	路	1
聞	17	百	7	成	4	減	3	切	2	離	1	輕	1	階	1	發	1	滿	1
有	16	復	7	念	4	彌	3	設	2	廡	1	刺	1	全	1	蓆	1	邑	1
今	16	求	7	日	4	讓	3	然	2	已	1	結	1	精	1	七	1	冥	1
三	16	行	7	久	4	由	3	禪	2	離	1	健	1	聖	1	病	1	臺	1
以	16	故	7	正	4	令	3	想	2	乾	1	堅	1	賢	1	雞	1	漏	1
王	15	訛	7	已	4	相	3	相	2	離	1	陰	1	請	1	妊	1	蕭	1
作	15	羅	7	唯	4	瘞	2	即	2	內	1	現	1	席	1	捏	1	寢	1
於	14	羣	7	愛	3	甘	2	宅	2	海	1	圓	1	垂	1	野	1	熬	1
千	14	受	6	惡	3	云	2	貌	2	銳	1	五	1	透	1	痴	1	門	1
其	14	應	6	頭	3	人	2	度	2	易	1	爻	1	仙	1	蠻	1	曉	1
來	14	可	6	異	3	失	2	悉	2	夫	1	候	1	尙	1	矯	1	訛	1
若	14	邈	6	丘	3	往	2	使	2	踊	1	校	1	梅	1	婆	1	羅	1
言	13	爾	6	及	3	多	2	月	2	弟	1	彖	1	俎	1	碼	1	宿	1
天	13	舍	6	御	3	己	2	次	2	鬼	1	號	1	矧	1	灰	1	戴	1
當	13	常	6	各	3	穩	2	齋	2	覺	1	皇	1	遭	1	柱	1	山	1
國	12	轉	6	河	3	女	2	同	2	思	1	告	1	象	1	八	1	惟	1
寶	12	名	6	願	3	化	2	鍛	2	愚	1	鵠	1	豫	1	離	1	便	1
中	12	二	6	虛	3	通	2	鄖	2	溫	1	哭	1	增	1	早	1	指	1
上	11	摩	6	𦥑	3	惟	2	波	2	加	1	志	1	憎	1	孫	1	許	1
億	11	萬	6	絆	3	彼	2	乃	2	解	1	忽	1	誠	1	反	1	擁	1
喜	11	糞	6	狗	3	親	2	殺	2	快	1	壽	1	則	1	火	1	曜	1
姑	11	利	6	苦	3	紙	2	駕	2	開	1	最	1	迷	1	疲	1	四	1
時	10	因	5	策	3	義	2	膳	2	廣	1	歲	1	俗	1	微	1	龍	1
阿	9	綠	5	隴	3	聘	2	林	2	學	1	酒	1	属	1	東	1	臨	1
尼	9	幸	5	諧	3	句	2	非	2	刀	1	先	1	空	1	廟	1	類	1
香	9	徒	5	肇	3	來	2	贊	2	川	1	授	1	拂	1	便	1	禮	1
供	9	莊	5	獸	3	擗	2	光	2	觀	1	誘	1	立	1	普	1	劣	1
經	9	陀	5	事	3	庵	2	逢	2	眼	1	貞	1	佗	1	伏	1	祿	1
見	9	地	5	沙	3	厥	2	漏	2	伎	1	昏	1	平	1	部	1	蒐	1
子	9	提	5	坐	3	誠	2	本	2	希	1	歎	1	諾	1	溥?	1	路	1
心	9	長	5	座	3	後	2	梵	2	記	1	漸	1	達	1	渾	1	勒	1

に埋め戻され、一部が余った土と一緒に周辺に散乱したものである。石は長径0.9~5.4cmだが90%は1.6~3.2cmに収まる。石はほとんどが円碟で楕円に近い石が多い。すべて同じ石材で色は白色を呈す。2mm前後の石英と長石の斑晶を含んでおりアブライトか花崗斑岩と思われる。地表面採取の石は墨書きが消失したものが多いが、外暈の建て直しに伴う掘削土中から出土したものには文字が明瞭なものがある。洗浄時に細かな筆を使用して、丁寧に洗浄したが、粘土質の泥を落とす過程で若干薄くなってしまった。出土した石は周辺丘陵上には存在しない石材である。担当者が関わった調査では博多区祇園町の博多遺跡第239次調査の際、萬行寺墓域の西側隣接地で同じ石材の礫が散乱しているのを確認した。礫は那珂178次にくらべ大きめの4~6cm前後で約40点確認したが、地表で採取したためか墨書きは確認できなかった。玉砂利などに利用するため流通していた石を転用した可能性が考えられる。今回採取した礫は3819点で、判読できた石が2095点、不鮮明で読みない石が1461点、墨書きが無い石が263点である。確認できた文字は557種で詳細は表1に記載した。江戸時代に流行したとされるが、今回は攪乱中からの出土で時期不明である。

### III. 小結

掘立柱建物3棟と竪穴式住居の可能性がある4軒と土坑敷基、柱穴状構造多数を確認した。掘立柱建物3棟は主軸が南北に近いSB01・03とそれと異なるSB02に別れ、時期差があるものと思われたが、出土遺物はいずれも6～7世紀と近い時期である。ただ出土遺物はいずれも小片で接合する破片もなく混入の可能性も考えられるため、建物の時期の上限を示すものと考えたい。竪穴式住居とした4軒の内のうち01・02は床面下の掘方のみ遺存したものと考えているが、詳細は不明である。

表2 遺構一覧表





Fig1 一字一石経露出状態



Fig2 外堀掘削断面の一字一石経出土状況



Fig3 P042上層（南から）



Fig4 P033上層（南西から）

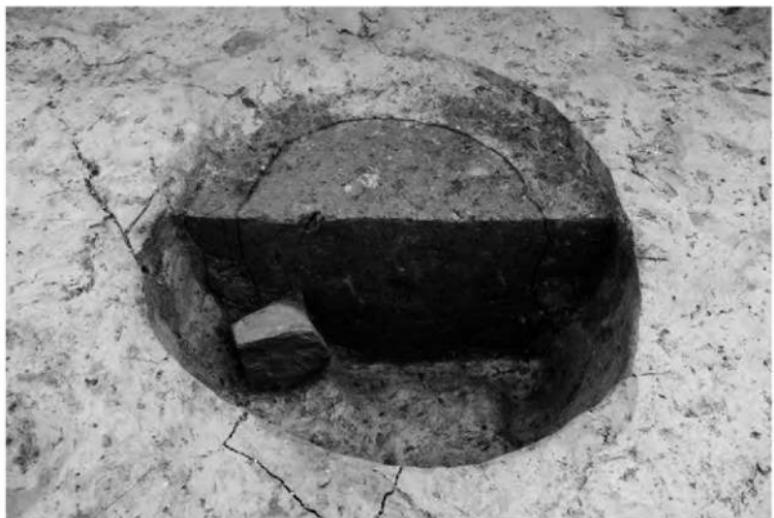


Fig5 P047土層（北東から）



Fig6 085（北から）



Fig7 P037土層（南から）



Fig8 調査前風景（南西から）



1) 調査区全景（東から）



2) SB01（東から）



1) SB02 (南東から)



2) SB03 (南から)



1) SC001 (東から)



2) SC002 (東から)



1) SC067 (北から)



2) SK075 (北から)



1) SK059 (東から)



2) SK091 (北から)



1) SK003土層（南から）



2) P039土層（南から）

## 報告書抄録

ふりがな	なか85							
書名	那珂85							
副書名	那珂遺跡第178次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1443集							
編著者名	屋山洋							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	2022年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因	
那珂遺跡	博多区那珂6丁目 313番1、314番1、 316番1、317番1 318番	40132	0085	33° 33° 58°	130° 26° 9°	2019.10.17 ~ 2019.11.29	196.98m <sup>2</sup>	自動車 営業所 整備
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
集落	弥生中期～ 近世	土坑・掘立柱建物 ・竪穴式住居	弥生土器・須恵器・ 土師器・一字一石経					
要約	<p>那珂遺跡は福岡平野中央部を流れる那珂川右岸の洪積丘陵上に位置する。今回の178次調査地点は那珂遺跡の南端に位置し、隣接する37次や51次・53次調査では、突帯文土器を伴う環濠が確認されている。また、東側に位置する56次・174次調査では古代から中世にかけての大型掘立柱建物や溝が出土しており、官衙や寺院もしくは居館等の存在が予想される。今回の178次調査では竪穴式住居、土坑、柱穴群が出土した。竪穴式住居は4軒確認したが、そのうち3軒は削平のため生活面は遺存しておらず、深さ3cm前後、残る1軒は深さ5～10cm程の遺存である。柱穴群では3棟の掘立柱建物を確認できた。そのうちSB01は3×3間の縦柱で24.7m、SB02は2×2間の側柱で13.6mを計る。調査区北側の道路に沿って往1～3cm程の白色の石が散乱しており、そのうちの一部に墨書きを確認した。墨書きには「佛」「経」などの字があり、一字一石経と考えられる。</p>							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1443集

### 那珂85

-那珂遺跡第178次調査報告-

2022(令和4)年3月24日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社大里印刷センター  
福岡市東区二又瀬新町12-29